

# ことばの せんすい 泉水

翻訳家

鴻巣友季子

東京は猛暑がつづく。仕事用の書棚とピアノをおいた半地下の部屋にも、カーテンのない天窓から陽が射しこみ、ピアノの鍵盤をまぶしく照らしている。そこで娘がワルツ曲の譜面とにらめっこしながら、ペダルと格闘中だ。幼い彼女はまだペダルをうまく操作できない。音がきれいに響かない箇所を何度も弾き直している。

「ピアノのペダルは、絵でいったら違う色と色をきれいに混ぜあわせる働きがあるね。まったく別の美しい音が生まれてくる。でも、絵の具と一緒に、きちんと使わないとただの濁った音になってしまう」

絵を描くのが好きな娘に、以前、先生はそう説いていらした。

「きれいな日本語を使いましょう」という言い方がある。翻訳家志望者たちのなかにも、「きれいに訳したい」「訳文をきれいに磨きたい」と希望してくる人がある。さて、「きれいな日本語」「きれいなことば」と言うときの「きれい」とはなんだろうか？

もちろん、文法や語法や漢字やその遣

い方などに誤りがないという技術的なことは非常に重要である。そこが違ってしまうと、そもそも伝えたいことが伝わらない。

先日、テレビの討論会で論敵に対し、「あ、あなたね、そんな勝手な憶測でものを言われると、わたしとしても大変心苦しいよ」と憤っている人がいて、一瞬きよんとした。

現在「心苦しい」は——念のため日本国語大辞典を引けば——「自分の心が苦しく感じるほど、切実に相手を気づかう感情をいう」のであり、おのれより先ず「他者を思う」という要素が必要になる。この発言者は、心の貧しげな相手をもつ。

あったことばだけが、本当の命脈をもつ。そして、ことばを輝かせるのは、その人の「読み」の力だ。

翻訳というのは、書く力が一割、読む力が九割だと、わたしはよく言っている。よく読めれば、よく訳せるという理屈だが、しかし「豊かな読み」を獲得するには、たしかな語学力（言語力）や文化などに関する知識と理解、リサーチ能力など、さまざまなスキルが必要であり、これらは日々鍛錬を繰り返すことでしか得られない。作品に対する深い読みや勘は、一般に言う「センス」や「感性」などという生ぬるい浅瀬からは決して出て

思いやって胸が痛んでいるのか、それとも、あえて私に受難を与えてくださり恐縮でございませう、と言いたいのか？ 威嚇するように始まった文章が、最後には人間愛と謙虚さの同居するものになっていて、なんだか文学的（？）である。異質なものがぶつかった衝撃の妙味がある。

実際はたんに「遺憾だ！」と唸（なぐ）りたかったのだろう。この「心苦しい」の用法はズレているから「きれいな日本語」とは言えないかもしれない。しかしわたしには「きたない日本語」「濁った日本語」とも思えないのである。詩人の穂村弘（むくむら）は「人は切羽詰まると詩人になる」と言っており、心の奥底の泉水から湧き出てきたことばは、ときに不思議な耀（きら）きをもつ。こうした間違いを、仏文学者の故・平岡篤頼（あつたか）は「誤訳のポエジー」と呼んだ。

また、ドイツの劇作家デア・ローアーはある劇の脚本を、徹底して語順の破壊されたドイツ語で書いた。和訳すれば、「だめだと言わなかったか？ 断じて ふさわしく 真つ当な 父親に

こないのだ。音楽でもまず楽譜が的確に読めなければ話にならないが、その「読み」をすぐれた表現に移していくためには、血の滲むような技術トレーニングと反復練習が必須となるだろう。それとやや似ているかもしれない。翻訳とは「読む」こと。「読み」とはワザの積み重ねであり、ワザとはその訳者の内面を映し出す鏡だ。ワザを磨くほどその人の内面がよく透けて見えてしまう、という怖さも翻訳にはつきまとう。

言うなれば原文もまだろくに読めず、作品の世界観もつかめず、文章力もない小さな「翻訳者」が、遠い時代に遠い国で書かれたワルツ曲をけんめいに訳そうとしている。わたしは娘の姿をそんなふうに眺める。ペダルを通して真に澄んだ音が出せるようになるのはいつだろう。ましてや、「自分らしい音」などというものを手にするまでには、気の遠くなるような時間と努力が要るだろう。それはまた、今以て原文を忠実に弾くことに四苦八苦している母も同じことである。

自分のことば、自分の音を夢見て、ひたすら歩いていこう。

鴻巣友季子  
こうのす ゆき こ

東京都生まれ。翻訳家。主な訳書に、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』、ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』、J.M.クッツェー『恥辱』『遅い男』ほか多数。文芸評論家、エッセイストとしても活躍し、『翻訳のココロ』（ポプラ社）、『孕むことば』（中央公論社）、『明治大正 翻訳ワンダーランド』（新潮社）、『全身翻訳家』『翻訳教室—はじめの一步』（以上、筑摩書房）、『熟成する物語たち』（新潮社）など、多数の著書がある。

